

犬猿の同僚 α に密室ヒートで Ω バレした私は、
番契
約で毎晩発情イカされて離されない

R18

2026
・
10
・
6

本文

目次

「今日は点検日だ。十時に全部閉まるぞ」

黒瀬課長は第三会議室のドアから顔だけ入れて、言い終わる前にもう腕時計を見ていた。月曜の夜八時半。七階の営業フロアで明かりがついているのは、もうこの部屋だけだ。

「課長、歯医者者は九時じゃなかったんですか」

「九時だ。取れた詰め物を入れ直すだけなのに、今日を逃すと来月になる」

廊下では藤咲りなが携帯を耳に当てて、「土曜の午前で内見、お願いできますか」と不動産屋に話している。電話を切ると、黒瀬の脇から手だけ入れて振った。

「あおいちゃん、お先。桐谷さんに怒られないでね」

「りなもお疲れ」

「お前ら、喧嘩だけはしないで帰れ」

二人の靴音がエレベーターのほうへ遠ざかり、会議室のドアが閉まって、いつものように錠がかちりと鳴った。

長机には、北斗信用金庫の本店移転、什器一式の見積が広げられている。向かいの席で桐谷蓮が赤ペンのキャップを外した。

「夏目。三行目」

「直しました。さっき」

「カウンターの搬入費が一階ぶんしか入ってない。北斗の新しい本店は二階が営業室だ。階段上げの人手が四人ぶん抜けてる。このまま出すと十八万、うちの持ち出しになる」

夏目あおいは三行目を見た。合っているから、言い方が気に障る。

「……じゃあ桐谷さんが直してください。そのほうが早いです」

「俺が直したら、お前の見積じゃなくなる」

赤ペンが机を滑ってきて、あおいの手もとで止まった。赤を入れるだけ入れて手は出さず、あおいが直すのを向かいで待つ。担当か

ら外したいなら、そう言えばいいのに。北斗さんは、あおいが自分の足で通って取った客先だ。

夕方に飲むはずの一錠は、フロアの自席の鞆の中にある。席へ戻ろうと腰を浮かすたびに向かいから「あと一か所」と声がかかり、座り直しているうちに九時を回ってしまった。理由を聞かれたら答えられないので、席に戻らせてくださいの一言が出てこない。

九時五十五分、あおいはペンを置いて立った。

「すみません、お手洗いに」

「合計。搬入費を直したのに、前のままだ。そこを打ったら行け」

座り直して電卓を叩く。指先が汗で滑って打ち間違えた。襟の内側が湿っている。そこへ、ドアのほうで重い音がした。がちゃん。廊下の奥でも同じ音がいくつか鳴る。十時ちょうどだった。

首の社員証をドアの横の読み取り機に当てても、赤いまま動かない。桐谷のカードでも同じだった。あおいは読み取り機の下に貼つてある警備会社の番号へ、携帯からかけた。

『入退室システムの月例点検中です。六時に復旧します。急病の方がいらっしゃれば、こちらから救急を呼びます』

「いえ、大丈夫です。二人とも元気なので。ですよー、点検日ですもんね」

笑って切った。救急車に乗れば、体質を調べられる。

桐谷は何も言わずにドアを見ていた。レバーを一度だけ下げ、戻して、そのまま手を離さない。

怒っている。あおいを引き止めたせいで閉じ込められた、と自分に腹を立てているのだろう。

「桐谷さんのせいじゃないですよ」

「……水はある。来客用のが一箱」

十時半を過ぎると、汗が止まらなくなった。

背中にブラウスが貼りつく。ストッキングの中で、腿の内側がぬるい。朝の一錠はとうに切れていた。

桐谷が上着を脱いで、隣の椅子の背に掛けた。ワイシャツの袖を肘までまくり、それから、あおいの向かいではなく長机の端の席へ移った。椅子二つぶん遠い。

「そんなに離れなくても。気を遣わなくていいです。βですから」
「席が近いと、俺が仕事にならない」

あおいはハンカチで首すじを押さえ、脇を締めた。

紺の上着から、桐谷の匂いが上がってくる。見積を見ているはずの顔が上着のほうへ向いて、鼻先が寄るたびに、下着の中がじゅわっと濡れた。

桐谷が立って、上着を取った。長机の向こうの端、あおいからいちばん遠い椅子へ掛け直す。

匂いが遠くなって、喉が鳴った。

「あの、寒いので」

「汗をかいてる」

「冷房がじかに当たるんです、この席。汗が冷えて、それで」

桐谷は上着の襟を持ったまま、こちらを見ている。この人に物を借りたことは、入社してから一度も無い。

「……貸してください」

桐谷は机を回って来て上着をあおいの膝に置き、また離れた席へ戻っていく。

裏地がまだ温かい。肩に掛けるつもりで持ち上げたのに、あおいは襟に顔を埋めて、深く吸い込んだ。体が勝手に動いた。椅子の上で腰がくねり、腿と腿がこすれて、ストッキングがしゅ、と鳴る。下着の中へ、とぷ、と愛液が出た。

「夏目。その匂いは、βじゃないな」

「βです。冷房が弱いんです、この部屋。残業が続いてて、汗っかきで、体力だけはあるので、すぐ熱がこもるんです。昔からそうで、夏なんかもっとひどくて、だから匂いも、汗の、汗が……っ」

「三年同じ島にいて、今日まで一度も外に出さなかった。今もそれだけ汗をかいて、喋り方が客先と変わらない。大した営業だと思う」
登録を偽った社員が営業に置いてもらえるはずがない。

「……誰にも言っていないんです。三年、誰にも」

「俺は言わない。課長にも人事にも。……朝まで七時間ある。薬は外だ。その熱は座っていて引くものじゃないだろ」

「引きます。いつも一人で、何とかしてきたので」

「鎮める。手だけだ。入れない」

「業務外です」

「残業はつけない」

「借りを作りたくないんです。桐谷さんには、とくに」

「借りにはならない。その匂いの横で朝まで座っていられるほど、俺は出来てない。俺の都合だ」

立って一歩下がった所で膝が抜けた。壁ぎわのカーペットに、あおいは座り込んだ。上着は胸に抱いたまま、パンプスが脱げて机の下へ転がっていく。

桐谷は壁とあおいの間に腰を下ろした。壁に背をつけて脚を開き、その間へ、あおいを後ろから引き寄せる。背中が桐谷の胸に当たった。ワイシャツ越しの体が熱い。上着よりずっと濃い匂いが、後ろから首を包む。

「もたれていい」

左腕が腹に回った。それだけで、ん、と鼻から声が抜ける。耳の後ろに桐谷の息がかかる。吐く息が長くて、少し震えていた。鼻先が髪に触れ、深く吸い込まれる。自分の匂いを吸われているのだと分かって、あおいの耳が燃えた。

「いい匂いだ。頭が回らなくなる」

左手がブラウスのボタンにかかる。上から順に外していき、下の三つを残して止まる。開いた前から手が入り、ブラの上から胸を包んだ。大きな手のひらで、汗ばんだ布ごとゆっくり持ち上げる。カ

ツプが上へずらされて、乳首が会議室の空気に触れた。もう硬く立っている。親指の腹がそこを一度だけ撫でた。

「っ……！」

「ここも汗だ。色が濃くなってる。きれいだな」

「見ないで、ください……」

「見る。見積より先に、こっちを見たかった」

人に見せたことのない所を、毎日ならみ合ってきた人に、蛍光灯の下で見られている。

背中が反って、後ろ頭が桐谷の肩にぶつかる。べっ甲色のヘアクリップがずれて、まとめた髪がひと房、首に落ちた。

胸の間で社員証が揺れている。ストラップが乳首の横をこすって邪魔だった。裸の胸に名前と顔写真をぶら下げているのがいたたまれなくて、あおいは首から抜こうとストラップをつかんだ。

「それは掛けておけ」

左手があおいの手ごとストラップを胸の上へ戻す。

「それを下げたお前に、俺は毎朝会ってきた。俺の前で外すことはない」

外すなど言われると、外すよりも恥ずかしい。札の裏には、自分で書いた字で「β」とある。それを下げたまま、乳首をつままれて

いる。指の間でゆっくり転がされると、腰の奥がきゅうつと絞られて、また下着が濡れた。

「ん、っ……そこ、は……」

手のひらが乳房を下からすくい上げた。重さを量るように持ち上げ、指を沈めて、放す。ぷるんと戻った所をまたつかむ。汗で手が滑って、ぬち、と肌が鳴った。揉まれるたびに、谷間の社員証が右へ左へ押される。札の角が乳首をかすめた。硬いプラスチックがひやりと当たって、あおいは喉を鳴らした。

桐谷はそれに気づいた。札を指で挟み、平たい面を、立った乳首の上にそつと伏せる。その上から手のひらで押さえて、ゆっくり円

を描いた。

「あ、っ……や、それ……っ♡」

自分の顔写真の裏で、乳首がこね回されている。つるつるの面に汗がついて、きゅ、きゅ、と小さく鳴く。もう片方の胸は放っておかれて、そちらの乳首ばかりが空気の中でじんじんする。触ってほしくて、あおいは背中を反らした。

「こっちもだな」

手が移った。待たせた乳首を二本の指でつまみ、根もとから先へしごく。ぴん、と弾かれて、腰が跳ねた。

「ひ、っ♡ ちが、いまのは、びっくりした、だけで……」

「驚くと、お前は耳の後ろまで赤くなる。向かいの席からは見えなかった」

右手が膝に置かれた。

スカートの裾から中へ入ってくる。ストッキングの上を、膝から腿の内側へ、手のひらが上がってくる。タイトスカートがずり上がって腰にたまった。脚を閉じようとしても、桐谷の両膝が外から挟んでいて逃げ場が無い。

「触るぞ、夏目」

中指が、ストッキングの上から脚の付け根に当たった。ナイロンと下着の二枚ごしに、割れ目を下から上へなぞる。ぬる、と布が滑

った。二枚とも、とっくに染みている。

「ん、っ……これは、汗です。座りっぱなしで、蒸れて」

「熱いな。指が火傷しそうだ」

違うとも、そうだとも言ってくれないのがつらい。指は同じ所を
ゆっくり往復する。布の上からなのに、クリトリスの上を通るたび
腰がびくんと跳ねた。ナイロンのざらつきがクリトリスをこすつ
て、じれったい。もっと強く、と思った自分に驚いて、あおいは上
着の襟を口に当てた。

「声は出している。朝までこの階には誰も来ない」

「出ません。出るようなこと、されてませんから」

「なら、もう少しちゃんとやる」

右手が腹まで上がり、ストッキングの腰のゴムをくぐった。今度は下着の上から触られる。薄い布一枚の向こうで、指の腹が割れ目を押し開く。くちゅ、と音がした。

「ちが、冷房、が……」

指が下着の縁をめくって、中へ入った。

じかに触れられた瞬間、あおいは上着の襟を嚙んでいた。濡れた毛をかき分けて、指が割れ目に沈む。ぬるぬるの中を上へ滑り、クリトリスを探し当てて、指の腹で軽く押さえた。

「ん、んっ……♡」

押さえたまま、小さな円を描く。皮の上から、ゆっくり。ぬち、ぬち、と粘る音が続く。腿が震えて、ストッキングの足先がカーペットを掻いた。左手は胸を離さない。乳首を指の股に挟んで、乳房ごと揉み上げる。上と下を同時にいじられて、どちらに息を合わせればいいのか分からない。

「桐谷さ、っ……手、汚れます、から……♡」

「ハンカチは二枚ある。こんなに出して、よく今まで座っていられた」

背中と桐谷の胸の間で、汗が混ざっている。ブラウスもワイシャツも濡れて、二枚ごしに桐谷の心臓が背骨を叩いた。速い。あおい

のと同じくらい速い。指が円を描くたびに腰が揺れ、揺れるたびに、裸の乳房が桐谷の左手の中で重く弾む。ストラップが首の後ろに食い込み、社員証は谷間を滑って、みぞおちの汗だまりまで落ちた。桐谷の指がそれを拾って、胸の真ん中へ置き直す。置き直した手がついでのように乳首をひねった。

「ん、あ……っ♡」

指が下へ降りた。膣の入口を、指先がくるりとなぞる。襞がひくついて、指を呑み込もうとすばまった。腰が前へ出る。入れてほしい、と体の奥が言っている。けれど指は入口の縁を一周して、溢れた愛液をすくうと、またクリトリスへ戻っていった。

入れない、と言った。言っただとおりにしている。それが、どうしてこんなにもどかしいのか。

すくったぬめりを塗りつけるように、指の腹がクリトリスの根もとから上へ撫で上げた。円が速くなる。ぬちゅ、くちゅ、ぬちゅ、と音が大きくなって、あおいは顔を上着に押しつけた。前も後ろも桐谷の匂いにする。

「夏目。腰が俺の指についてくる。上手だ」

「ちが、これは……っ、ん♡」

言い訳が出てこない。頭を振ると、クリップが外れかけて髪が肩に崩れた。胸の上で社員証がぱたぱた跳ねる。指の腹がいちばんつ

らい一点を押さえて細かく震わせた。

「あ、っ♡ だめです、それ、いま、っ……あ♡」

腹の底の熱がいつぺんに弾けた。

腰が浮いて、桐谷の手に自分から押しつけてしまう。腿が閉じて、挟んだ手首を締めつける。奥が何度も縮んで、愛液がとぷ、とぷ、と指の上へ溢れた。声は襟に吸わせたのに、最後だけ漏れた。

「ん、んん……っ♡♡」

桐谷の指は縮みが収まるまでクリトリスの上にただ置かれていた。動かさない。押さえているだけなのに、脈に合わせて小さな波が何度もある。

「今の声がいい。会議では一度も聞いたことがない」

「……会議で、出しません、こんなの」

言い返したのに、腰から下に力が入らない。あおいは桐谷の胸に沈んだ。開いたままの腿の間で、下着もストッキングもぐっしより重い。桐谷の手のひらは、濡れた割れ目をまるごと覆って動かなかった。その熱い蓋の下で、膣の入口がひく、ひく、と何かを探すように口を開けている。左手は胸を下から支えたままで、親指がときどき、思い出したように乳首の横を撫でた。そのたびに社員証が揺れて、汗の谷間にぺたりと戻る。

息が整うのを待った。整わない。奥の縮みが引いたあとに、同じ熱がもう一度上がってくる。さつきより熱い。止まった手のひらへ、あおいは腰を浅く擦りつけた。恥ずかしくて泣きたいのに、やめられない。

「……引きません。すみません、いつもは、一度で」

「一度で引く匂いじゃない。口を使う。入れないのは変わらない」

桐谷は下着から手を抜いた。指が根もとまで光っている。それをワイシャツで拭きもせず、あおいの腕から上着を取り、カーペットに広げた。その上へ、あおいを仰向けに寝かせる。紺の裏地が背中に温かい。スカートは腰までまくれたままだ。

桐谷は左の肘をあおいの頭の横について、覆いかぶさった。右手が開いたブラウスを左右へ払う。ブラは鎖骨の下までずり上がっている。裸の胸の真ん中に、社員証が一枚、汗で貼りついていた。

「さっきは後ろからで、口が届かなかった」

顔が下りてくる。息が乳首にかかって、それだけで先が硬く縮んだ。唇が触れる。乾いた唇が一度浅く挟んで、それから、濡れた舌がぺろりと舐め上げた。

「あ、っ♡」

熱くて、ざらりとして、柔らかい。舌先が乳首のまわりをぐるりと回り、根もとを押し、先だけをちろちろ弾く。あおいは両手の置

き場が分からなくて、上着の裏地をつかんだ。

唇が乳首を包んで、吸った。

ちゅ、と音がする。吸われた先が口の中で伸びて、舌の腹でねっとり転がされる。胸の奥から腹の底へ、糸を引かれたように熱が走った。腰が上着の上で浮く。

「ん、んっ♡ 吸わ、ないで……あと、残り、ます、から……っ」

桐谷は口を離さない。ちゅう、ちゅぱ、と濡れた音を立てて、少し強く吸う。右手はもう片方の乳房をつかんで、親指で乳首を左右に倒していた。

口が離れた。唾で濡れた乳首に空調の風が当たって、ひやりとする。唇は谷間を横切り、貼りついた社員証を鼻先でどけて、反対の乳首へ移った。どけられた札が濡れたばかりの乳首の上に落ちる。冷たい。

「ひ、あ……っ♡」

あおいは首を振った。ストラップが引かれて、崩れた髪がうなじで絡まる。逃げたいのに、胸は桐谷の口へ突き出している。

「胸を吸うと腰が上がる。覚えた」

「お、覚えなくて、いいです……っ♡」

桐谷は濡れた乳首にもう一度だけ唇をつけてから、体を下へずらした。

指がストッキングと下着の縁にかかり、まとめて膝まで下ろす。右脚だけ、足先から抜かれた。濡れた布がはがれて、割れ目に空気が当たる。糸を引いたのが自分で分かった。

両手が腿の内側に置かれ、左右へ押し開く。左の膝に残ったストッキングが引っぱられて、ぴり、と伝線する音がした。明るい蛍光灯の下で、全部見られている。毛が濡れて肌に貼りつき、その下で割れ目が開いて、ひくついている。桐谷の顔がそこへ下りていく。

片手が腿を離れ、胸の間の社員証をつまんで裏返した。体質の欄を、桐谷はしばらく見ていた。

「この札を下げて三年、よく通した」

札が胸に戻され、手も腿に戻る。

鼻先が毛に埋まった。深く吸い込む音がする。匂いを吸われていく。ああいが腰を引こうとすると、両手が腿を押さえて、開いたまま床に留めた。

熱い舌が割れ目を下から舐め上げた。

「ひ、っ………♡」

膺の入口から、クリトリスの下まで。平たい舌がべろりと通って、愛液をさらっていく。もう一度。もう一度。舐められるたびに奥から新しく溢れて、じゅる、と啜る音が立った。あおいは両手で口を押さえた。この人が自分の出したものを飲んでいる。

舌先が入口の縁をくるりとなぞった。襷がすばまる。入ってはこない。縁だけを舐めて、溢れた分を唇で吸い取る。

「や、そんな所、口で……きたない、です、から……っ♡」

「夏目の味がする。薬の味はしない」

舌が上へ来た。唇がクリトリスを包んで、ちゅ、と吸う。皮ごと口に含まれて、舌先でちろちろ弾かれる。腰が跳ねるたび、社員証

が胸の間で跳ねて、ぺた、ぺた、と汗の肌を叩いた。濡れた乳首がまだ冷たい。上も下も、桐谷の唾で濡れている。

唇が強く吸いついた。舌の腹がクリトリスをべったり押しつぶして、左右に揺する。腿が震えて、桐谷の耳を挟んだ。挟まれても舌は止まらない。じゅ、ちゅぷ、じゅる、と音が続く。

「あ、あ♡ だめ、また、っ……ん♡」

奥がぎゅうっと縮んで、さっきより深い所から波が来る。背中が上着の上で反り、足の指が丸まった。吸われたまま、あおいはもう一度いった。

「ん、ん♡ っ、あ♡ きりたに、さ……っ♡♡」

押さえた手の下から、自分のものと思えない甘い声がこぼれた。腰が浮かないように、桐谷の両手が腿を床へ押さえている。その手の中で、いくたびに腿がびくびく跳ねた。舌は波が引くまでクリトリスの上において、最後に、溢れた愛液をひと舐めで拭っていった。舐められた所がじんと熱い。まだ吸われている気がして、膣の入口がひくりと縮む。

舌が離れたあとも、腰だけがしばらく震えていた。

桐谷は体を起こすと、手の甲で口をぬぐった。段ボールから水を一本抜いてキャップをゆるめ、あおいの手に持たせる。長机の上の

ウェットティッシュの箱を、あおいの腰の横に置いた。それから背を向け、壁のほうを向いて座った。

あおいは起き上がって水を飲み、左脚に残った伝線したストッキングを脱いで、椅子の背に掛けた。ウェットティッシュで胸と割れ目を拭き、濡れた下着を穿き直す。ブラを戻してブラウスの前を合わせたが、指が動かなくて、上のボタンは留められなかった。首には社員証が下がったまままだ。

桐谷がネクタイをゆるめ、向きを変えて壁にもたれ直した。スラックスの前が内側から押し上げられてはつきり張っている。桐谷は何も言わない。窓のほうを見ている。

鎮めてもらったのは自分だけだ。

壁の時計は十一時五十分を指していた。

腹の底で、また熱が上がった。拭いたばかりの下着が濡れる。上着の上で膝をそろえて座り直しても、腿をこすり合わせるのをやめられない。半歩先から桐谷の匂いがする。

「水、もう一本ある」

桐谷が段ボールへ手を伸ばしかけた。

あおいは時計をもう一度見て、ウェットティッシュを握ったまま、膝で桐谷のほうへ一歩寄った。

「私だけは、困ります」

あおいの指は桐谷のベルトの金具の上で止まっていた。壁ぎわの床に脚を投げ出して座る桐谷の、腿の横に膝をついたまま、外し方が分からない。指が汗で滑る。革の下で、スラックスの布が硬く張っている。壁の時計はもうすぐ日付が変わる所を指していた。

桐谷は手を払わなかった。あおいの指を見下ろしている。

「私だけ鎮めてもらって、桐谷さんはそのまま朝まで、というのは。そういうのは落ち着かないんです、私」

「貸してない。俺が先に取った」

「取ったって、何をですか」

「お前の声と、匂い。……三年ぶん、まとめて取った。釣りが出る」

釣りが出る人の体には見えない、とあおいは金具の下を見て思った。それでも触らせないのは、Ωの手が嫌だからだ。さっきのは、同じ部屋にいるαの務めだった。胸の下が冷えて、指に意地が入った。

「じゃあ、私にも取らせてください。不公平です」

金具は外れない。引いても押しても鳴るだけだ。

桐谷の手が上から来て、あおいの指をどけた。片手で金具を起こし、ベルトを抜く。それから立ち上がり、長机の、いつもの自分の席へ行って椅子を引いた。腰を下ろして、あおいを見る。

「床は冷える。こっちに来い」

椅子の前には、机の下の暗がりしかない。

あおいは四つんばいで、長机の下へ入った。素足の膝にカーペツトがざらつく。肩をすばめないと脚の間に収まらなかった。頭の上は白い天板の裏だ。この上でさつきまで、搬入費が抜けているの合計が違うのと言いついていた。

桐谷の片手が天板の裏に当てられた。あおいの頭がぶつからないように、そこへ手のひらを挟んでいる。

もう片方の手がスラックスのボタンを外し、ファスナーを下ろした。下着を押し下げる。

出てきたおちんぽが、あおいの頬のすぐ前で重く揺れた。

大きい。あおいの手首より太く、上へ反っている。皮がつるりと張って、太い筋が浮いていた。亀頭は赤黒く張って、濡れている。机の下に、桐谷の匂いがいっぺんに濃くこもった。上着の襟の何倍も強い。吸ったとたん、あおいの下着の中がきゅんと縮んで、どろりと溢れた。

「……これ、手で、いいんですよね」

「好きにしている」

両手で握った。熱い。指が回りきらない。手のひらの中で、どく、どく、と脈を打っている。根もとから上へ動かすと皮がついてきて、亀頭の割れ目から透明な汁がぷくりと玉になった。

この先どうすればいいのか分からない。聞くのも癪で、あおいは玉を親指で塗り広げた。ぬるりと滑る。桐谷の腿が硬くなった。

「夏目の手は小さいな。両手でも余る」

「桐谷さんのが、大きすぎるんです」

言い返したものの、手は止められなかった。握って、上げて、下ろす。くち、くち、と濡れた音が机の下にこもる。透明な汁が後から後から出て、指の股へ流れてくる。匂いで頭がぼうつとする。口の中に唾がたまって、飲み込んでもまた湧いた。

握った手の上へ、自分の唾が一滴落ちた。口が開いていた。あわてて閉じると、桐谷の指が天板の裏でこつりと鳴った。

「いい手つきだ。力を抜いてるのに、離さない」

「……初めてなので、加減が分からないだけです」

「初めてでそれなら、余計にいい」

褒められると手に力が入ってしまふ。握り直した拍子に、亀頭の割れ目からまたひと玉、あふれて垂れた。指の間で糸を引く。

舐めたい。そう浮かんだとたんに顔が熱くなった。

さっきこの人はあおいの割れ目に口をつけた。きたないと言ったのに吸った。それなら同じだ。同じことを返すだけだ。

あおいは顔を寄せて、亀頭に唇を当てた。

塩気と、少しの苦み。舌を出して、割れ目を舐める。桐谷の息が頭の上で一度止まった。

舌を平たくして、根もとまで下りてみる。浮いた筋を下から上へたどる。舌に当たる皮は思ったよりなめらかで、その下が鉄のように硬い。頬に熱い幹が当たって、ぬるりと滑った。毛の生えた根もとに鼻が埋まると、匂いがいちばん濃い。吸い込むと頭がしびれて、ついていた膝が左右へずるりと開いた。腰が落ちる。下着の中で、愛液がまたひとかたまり出たのが分かった。

口を開けて、含んだ。

「ん、む……」

顎がいったいに開く。亀頭を入れただけで口の中がふさがった。舌の置き場が無い。動かそうとして、歯が当たった。

「す、すみま……っ」

「いい。続けろ」

天板の裏の手はそのまま、もう片方の手があおいの頭に来た。外れかけていたヘアクリップをつまんで抜き、机の上に置く。かたんと頭の上で音がした。髪がばさりと落ちて、頬と肩にかかる。指がその髪を耳の後ろへかき上げた。

「顔が見えない」

あおいは啞えたまま目だけ上げた。机の縁の向こうから、桐谷がのぞき込んでいる。恥ずかしくて、つい、にらんだ。

「その目は会議で俺をにらむ時と同じだ。同じ目で、俺のを口に入ってる。夏目。たまらないな」

「ん、んう……♡」

抗議したつもりの声が喉でくぐもった。その震えが伝わったのか、口の中のおちんぽがびくんと跳ねて、舌の上にとろりと苦い汁が出た。

飲み込んだ。

喉を通して、胃に落ちる。落ちた所から、腹の熱が少しだけ引いた。水を飲んだ時とは違う。体の奥の、熱の根に届く感じがした。

もっと欲しい。

あおいは頭を前へ出した。唇で皮をしごきながら、入る所まで呑む。上あごに当たって、それより奥へは行かない。入りきらない根もとを両手で握って、口と一緒に動かした。ふ、う、と鼻で息をする。じゅぷ、じゅぽ、と自分の口が立てる音がいやらしくて、耳をふさぎたいのに手が離せない。

頭の上で紙がずれる音がした。前へかがんだ桐谷の胸が広げたままの見積を押しやっている。

「舌が熱い。お前の口の中はどこもそんなに熱いのか」

答えられるわけがない。あおいは舌を裏の筋に押しつけて、下から上へ舐め上げた。桐谷の腿が跳ねる。髪の中の指に力が入った。押さえつけはしない。耳の後ろを、指の腹で撫でている。

開いたブラウスの胸が桐谷の膝の内側に当たっている。頭を動かすたびに、ブラの上から乳首がストラックスの布にこすれた。それだけのことで、背中がぞくぞくする。

膝がカーペットにこすれて熱い。頭を前へ出すたびに膝頭が毛足を搔き、引くたびに戻る。素足の脛に、床の冷たさが下から上がっ

てくる。上は桐谷の匂いで蒸されて、下は冷たい。その間で、腰だけが火のついたように熱かった。

吸い込むたびに腰が落ちていく。尻が踵に乗った。穿き直した下着はもう役に立っていない。布から染み出した愛液が踵にぬるく垂れた。腿の内側を伝って、膝の裏にもたまる。カーペットに丸い染みができているのが、見なくても分かった。

踵の骨が下着ごしに割れ目へ当たっている。腰を揺らすと、濡れた布がクリトリスの上をずるりと滑った。

「ん、む、んっ♡ ふ、う……♡」

やめようとしても、頭を動かせば腰も動く。口の奥を亀頭に突かれるのと、踵にクリトリスを押されるのが、同じ拍子で来る。咥えているだけなのに、あおいの膣は空のまま何度もすばまって、そのたびに新しい愛液を踵へ吐き出した。くちゅ、と自分の下から音が出る。上の口の音と混ざって、どちらの音か分からない。机の下は空気は桐谷の匂いと自分の匂いで、もう息が苦しいほど濃かった。

「机の下から、お前の匂いが上がってくる。……夏目。俺のを舐めてそうなるなら、俺は朝まで機嫌がいい」

「ん、んんっ……♡」

違います、と言える口ではない。首を振ると、啞えたおちんぽが頬の内側をこすって、また腰が落ちた。

天板の裏で、手のひらが板を押す音がした。椅子の脚がきしむ。桐谷の腹が硬く締まって、髪の中の指が止まった。

あおいは何が起きるのか分からないまま、舌で亀頭をぐるりとこすった。

「……っ、夏目」

口の中で、根もとから太くなる。

精液が喉の奥を打った。熱い。どく、どく、と脈ごとに出る。濃くて重い。舌の上に溜まって、飲み込むより先に次が来る。一度飲

んだ。もう一度飲んだ。それでも止まらない。口の端から溢れて顎を伝い、ボタンを留めていない胸の間へ落ちた。社員証のストラップにも白くかかる。

「ん、んく……けほ、っ」

むせて口が離れた。最後のひと筋が唇から頬へ飛んだ。

あおいは机の下で肩を上下させた。口の中が桐谷の味でいっぱいだ。舌に残った精液を、こくんと飲む。

飲んだぶんだけ、腹の熱が小さくなっていく。腿の震えが引いていく。番でもないαの精液で、体が鎮まっていくな。薬より早い。

目の前では、出したばかりのおちんぽが、濡れて光ったまま、まだ半分上を向いている。あおいの唾と精液が混ざって、根もとの毛まで汚していた。自分がやったのだと思うと、引いたはずの腹の奥がまた疼いた。

桐谷は椅子の背にもたれて、長く息を吐いた。天板の裏から手が下りてくる。その手のひらに、板の木目の跡が赤くついていた。

桐谷は下着とスラックスの前を直した。

「出て来い」

椅子が後ろへ引かれて、あおいは机の下から這い出た。立とうとした腕を桐谷が取って、隣の椅子に座らせる。

壁ぎわの床に置いたままだったウェットティッシュの箱を、今度は桐谷が取ってきた。一枚抜いて、あおいの顎を拭く。口の端、頬、首。それから胸の間。冷たい紙が肌の上を下りて行って、ブラの縁で止まり、ストラップの精液も拭き取った。社員証の表の、顔写真の上まで丁寧拭く。

ブラウスの胸には、こぼれた精液が染みていた。桐谷は紙を替えて何度か押さえたが、色が残った。

「落ちないな。悪い」

「いえ。私がこぼしたので」

「全部飲もうとしただろ。初めてであれだけ飲めたら十分だ」

褒められて、あおいは膝の上でスカートを握った。

「口です。いつも口だけは強いんです」

言ってから、何の自慢だか分からなくなった。桐谷は笑わずに、水のキャップを開けて渡してくれた。

午前二時。二人は椅子を並べて、来客用の水を飲んでいた。

熱は引いている。頭がやっと仕事の時の速さで回りはじめた。回らなければよかった。隣のこの人に何をして、何をされたのか、全部覚えていて。

覚えているついでに、別のことも思い出した。

「桐谷さん。聞いてもいいですか」

「何だ」

「秋の、二課との合同会議。一課で私だけ外れたの。あと、去年の席替えで、私が窓ぎわの端になったの」

桐谷がペットボトルを机に置いた。

「全部、桐谷さんですよね」

長い間があった。空調の音がする。

「俺だ」

「どうしてですか」

「二課はαが多い。窓ぎわの端は向かいが俺で、後ろが壁だ」

「……いつから、分かってたんですか」

「入社の日。挨拶に来ただろ。匂いで引っかけた。βじゃないかもしれないと思った。確かめる方法が無かった。聞けば、お前は辞めると思った」

聞いた分だけ、短く返ってくる。

邪魔だから端へやられたのだと、ずっと思っていた。それで腹を立てて、にらんで、見積で見返すつもりでやってきた。

この人は知っていた。知っていて、誰にも言わなかった。肩の力が抜けそうになって、あおいはあわてて背すじを伸ばした。

「先に決めないでください。私、荷物じゃないです」

「……覚えておく」

「覚える気のない顔です」

「あの会議は二課のαが六人出てた。お前の席はその真ん中だった」

「それは、でも」

言い返す言葉が続かなかった。その席に座っていたら、今日より前に知られていたかもしれない。

「……水、もう一本ください」

桐谷は段ボールから一本抜いて、キャップをゆるめてから渡した。

午前四時、熱がぶり返した。

椅子でうとうとしていた体が、内側から叩き起こされる。ブラインドの隙間が青い。夜が明けかけている。あと二時間で錠が開くのに、腹の熱はさつきより高かった。

あおいは椅子を立て、窓ぎわへ行つた。桐谷から離れたかった。近くにしていると匂いで駄目になる。窓枠に両手をついて、冷たいアルミに額を寄せる。

後ろに桐谷が立った。背中が温かくなる。

「来ないでください」

「膝が震えてる」

左腕が後ろから腹に回った。背中に桐谷の胸が当たる。それだけで腰が砕けそうになって、あおいは窓枠を握りしめた。

「一人で窓まで歩いた。こんなに匂いをさせて、まだ自分で立とうとする。そういう所を、向かいの席でずっと見てた」

褒め言葉が耳から入って、腹の熱をあおった。あおいは首を振る。

「大丈夫です。あと二時間なので。六時になったら電車で帰って、シャワーを浴びて、十時には北斗の見積を」

「その見積、俺はいま一行も読めない。お前の匂いで」

右手がスカートをたくし上げた。下着の上から、濡れた布ごと割れ目を手のひらで包む。じゅ、と布が鳴った。あおいが息を呑むのを待って、手は下着の腰から中へ入ってきた。

「ん……っ♡」

もうどろどろだった。指が割れ目を滑って、クリトリスを一度撫で、そのまま下へ降りる。膣の入口に、中指の先が当たった。

「指を一本、入れる。さっきは入れなかった」

ぬぷ、と指先が沈んだ。

「あ、っ……っ♡」

入ってくる。誰も入ったことのない所を、桐谷の指が押し広げていく。太い。関節が襞をひとつずつ越えるのが分かる。ゆっくりで、止まらない。根もとまで入って、手のひらがクリトリスにぴたりと当たった。

「熱い。口の中より熱い」

「い、言わないで、ください……♡」

「初めて入れたのに、もう奥へ引き込む。夏目の体は覚えが早い」

指が中で曲がった。腹の側の壁を、指の腹がそつと押す。そこを押されると、目の前のブラインドがぼやけた。抜けていって、また

入ってくる。ぬち、ぬぶ、と濡れた音が窓ぎわに立つ。手のひらがクリトリスをこすり、指が奥を押す。

素足の指がカーペットをつかんだ。指が奥へ入るたびに踵が浮いて、抜けるたびに落ちる。腿の内側を愛液が伝い、膝の横を過ぎて、くるぶしまで下りていった。ブラインドの隙間の青い光の中で、窓ガラスが自分の息で丸く曇る。曇りは、突かれるたびに大きくなった。膝が内側へ折れて、あおいは桐谷の腕に腹で寄りかかった。

腰の後ろに、硬いおちんぽが当たっている。スラックスごしでも形が分かる。さつき口に入れた、あの太さだ。桐谷はそれを押しつ

けもせず、引きもしない。指だけを動かしている。指一本でこんな
にいっぱいなのにな、あれが入ったらどうなるのか。考えたたん、
襷が指にきゅうつと吸いついた。

「夏目。今、腰が俺のほうへ来た」

「ち、力が入っただけです。立ってるので……っ♡」

「この熱で立っていられるのが、大したものだ」

腹から左腕が離れた。その手があおいの下ろした髪を片側へ寄せ
て、肩の前へ流す。襟足が出た。左腕はすぐ腹へ戻って、体を抱え
直す。

うなじに、息がかかった。

唇が襟足の下に触れる。それから、硬いものが乗った。歯だ。皮膚の上に、上下の歯が置かれている。

咬まれる。

そう思った瞬間、背骨の中を甘いしびれが駆け下りた。奥が指をぎゅうっと抱く。咬んでほしい。口には出せない。出せないかわりに、あおいは自分から首を前へ倒して、襟足を歯に差し出していた。

指が奥を押し上げた。

「あ♡ あ♡ くび、そこ……っ♡♡」

腰が跳ねた。膝が窓の下の壁にぶつかる。膣が指を何度も絞つて、手のひらへ愛液があふれる。額が窓枠にぶつかり、ブラインドがしゃらりと鳴った。声が止まらない。額を窓枠に押しつけたまま、あおいはいった。

「っ、ん♡」

遅れてもう一つ、小さな波が来た。

歯は乗っているだけだった。あおいの震えが収まるまで動かず、それから、歯の跡もつけずに離れた。離れた所に唇が一度だけ押し当てられる。

「咬みたい」

耳の後ろで、桐谷が言った。息が熱い。

「今咬んだら、お前は熱のせいにする。だから返事は熱が引いてからにしろ」

指が抜けていった。空いた中がひくひくと閉じたり開いたりする。

「俺の番になれ。口約束にはしない。番の契約だ。番になれば、体が俺を覚えるまで毎晩、熱が戻る。その毎晩を俺によこせ」

あおいは窓枠につかまったまま振り向いた。桐谷の顔は会議で数字を詰める時と同じ真面目さだった。

責任を取る気だ、と思った。鎮めた以上は最後まで面倒を見る、という申し出に聞こえる。

「あの」

咬まれたかった首の後ろが、まだ熱い。それを言うわけにはいかない、あおいは別のことを喋った。

「今夜だけのことに、できませんか。朝になったら忘れる、で。契約って、期間は。月に一度の、あの数日だけじゃ駄目ですか。咬むのは無しで。毎晩なんて。私、見積が」

「全部駄目だ。咬む。定着するまで毎晩だ。期限は無い」

「契約したら、毎晩、こうなるんですか」

「なる。毎晩、俺が鎮める」

膝の力が抜けて、あおいは窓の下にしゃがみ込んだ。スカートの中で、いったばかりの所がまだひくついている。毎晩。この指が毎晩。

「……返事は熱が引いてからでいいんですよね」

「そう言った」

「じゃあ、まだです。まだ引いてませんか」

「待つ」

桐谷は濡れた右手を拭かずに、ゆっくり握り込んだ。あおいは見なかったことにして、膝に顔を伏せた。

錠が開く少し前に、あおいは身支度をした。

椅子の背のストッキングは、伝線が腿まで走っていて穿けない。丸めて手に持ったまま、置き場に困った。ブラウスのボタンを上まです留めても、胸の染みは隠れない。

桐谷が床の上着を拾い、裏地をはたいて、あおいの肩に着せかけた。袖が指先まで来る。前を合わせると染みが隠れた。

「着て帰れ」

「クリーニングして返します」

「そのままでもいい」

あおいはストッキングを、スカートのポケットに押し込んだ。素足にパンプスを履く。髪をまとめようと頭に手をやって、クリップが無いのに気づいた。探そうとした時、ドアで電子音が鳴った。

ぴ、と一度。読み取り機の赤が緑に変わる。壁の時計は六時を指していた。ブラインドの外はもう白い。

桐谷が長机の上から何か小さな物を取って、スラックスのポケットに入れた。ネクタイは外して、もう片方のポケットに入っている。ドアを引いて開け、背中を押さえた。フロアには誰もいない。並んだ机の上を、朝の光が斜めに渡っている。

あおいは自分の席のほうへ足を向けた。鞆がそこにある。薬もそこにある。

「夏目」

振り向くと、桐谷はドアを押さえたまま言った。

「俺は本気だ。見積は十時までに俺が直す。お前は帰って寝ろ」

「……私が直します。私の、なので」

足元の紙袋を、あおいはパンプスの先で机の奥へ押しこんだ。畳んだ紺の上着が入っている。火曜の午前十時、七階の営業フロアは電話の声でいつもどおり騒がしい。

「夏目。北斗の見積、三行目」

向かいの席の桐谷は画面を見たまま言った。

「搬入費なら直しました。さつき送った版です」

「その二つ下だ。椅子の単価が三月のままだ。四月に改定が入ってる。一脚四百円違う。百二十脚で四万八千円」

「……今、直します」

「昼までに」

いつもの長さの指摘だった。顔色も変わっていない。この人の中では、もう済んだ用件なのだろう。

「あおいちゃん、髪下ろしてるの珍しいね。似合う」

隣の席から、藤咲が椅子ごと寄ってきた。

「クリップ、どこかに置いてきちゃって」

「あのべっ甲の？ もつたいない」

そこへ黒瀬がバインダーを突き出した。部の飲み会の出欠表で、上から順に丸が並んでいる。

「夏目、書いたら桐谷に回せ。あいつは毎回、最後まで出さん」

あおいは丸を書いて、向かいの席へ腕を伸ばした。

「桐谷さん、出欠です」

「置いといてくれ」

目も上げない。あおいはバインダーを、桐谷のキーボードの上に置いてやった。

昼。藤咲はコンビニのサラダを端へどけて、机いっぱいの間取り図を広げていた。

「ねえ、これ洗濯機置けると思う？　置き場の幅が六十センチしかないの」

「測ってから決めたほうがいいよ。ごめん、ちょっと出てくる」

紙袋を提げて、非常階段の扉を押す。七階と八階の間の踊り場に、桐谷が先に立っていた。

「これ、ありがとうございます。襟にファンデーションが付いてしまつて。クリーニングに出す時間がなくて、すみません」

桐谷は袋の口を開けて襟を見て、閉じた。

「熱は」

「引きました。二錠飲んだので」

「じゃあ聞く。昨夜の話だ」

「受けます。ただ、条件があります。社内は今までどおりにしてください。誰にも言わないでください。課長にも、りなにも。それと、金曜に北斗の見積を出すまで待つてください。それまでは薬で持たせますから」

「分かった。俺からは二つ。定着するまで毎晩、俺の部屋に來い。抑制剤は俺に預けろ」

「預けるって、全部ですか」

「全部だ。咬んだら効かなくなる。効かない薬を足して飲むな」

契約というのは、ずいぶん細かい所まで決めるものらしい。あおいは「分かりました」とうなずいた。

「それと、明日の十八時半。駅の向こうの婦人科を予約した。番持ち用の避妊薬は初診だと処方に時間がかかる」

「もう取ったんですか。私、今返事したところなんですけど」

「今朝九時に取った。断られたら取り消すつもりだった」

「……そういうのは先に聞いてください。行きますけど。行きますけど、先に聞いてください」

桐谷は答える代わりに、ズボンのポケットからべっ甲色のクリップを出した。

「机に残ってた」

「あ……」

「金曜からは、それで上げるな。跡が出る。隠すなら髪を下ろせ。

きれいだから、俺は困らない」

受け取ったクリップが手の中でぬるい。何か言い返さなければと思うのに、口から出たのは別のことだった。

「……見積、直してきます。四万八千円」

水曜の夕方、婦人科の待合。受付で渡された紙の「付き添いの方（続柄）」の欄で、隣の桐谷のペンが止まった。少しして、「同僚」と書いた。

同僚。そのとおりだ。そのとおりなのに、あおいは膝の上の保険証を二度持ち直した。何と書いてほしかったのか、自分でも分からない。

薬は毎朝一錠、効きはじめるまで一週間。会計で桐谷が財布を出したので、あおいは先に札を置いた。

「私の薬なので」

金曜の夕方、あおいは北斗信用金庫の見積を桐谷の机に置いた。

桐谷は赤ペンを握ったまま最後の頁まで読み、キャップを外さなかつた。

「課長。北斗、夏目の版で出します」

「おう。出欠表もそのくらい早く出せ」

作成者の欄は夏目あおいのまま通った。

その夜、会社から二駅。駅から十分歩いたマンションの六階で、桐谷は玄関に新しいスリッパを置いて待っていた。女物で、足を入れると踵までびったり収まる。

「二十三半で合ってるよな」

「……合ってます」

リビングのソファに鞆を置いて上着を脱ぐと、桐谷が手を出した。

「葉」

あおいは鞆の内ポケットから白いシートを出した。出したのに、指が離れない。

「これで三年通したんです。朝に一錠、長引く日は夕方にもう一錠。客先で一度も休んでません。北斗さんの受付の人の名前、三人とも言えます。守衛さんが腰を悪くしてるのも知ってます。そういうのは得意なんです、私」

桐谷はあおいの指からシートを抜いた。鞆の底の予備も出させて、引き戸の向こうの寝室へ持っていく。チェストの一番上の引き出しが開いて、閉まった。

「もう要らない。俺がいる」

あおいは寝室の入口で、スリッパの先を見ていた。新しい布の、まだ毛羽立っていない爪先。

「……何か違ったか」

「いえ。どうせ効かなくなるんですよね」

夕方の一錠は飲まずに来た。腹の底で、熱がもう起きている。桐谷の匂いしかない部屋で、汗が襟の内側を伝った。

「髪、自分で上げろ」

あおいはスカートのポケットからクリップを出した。開く前に、桐谷がそれを取ってチェストの上に置く。

「手で」

「……手だと、落ちます」

「落ちたら拾え」

両手を首の後ろへ回し、髪を束ねて持ち上げた。脇が開いて、ブラウスの背中が汗で貼りついているのが自分で分かる。襟足に部屋の空気が当たった。毎日クリップで上げて、人前に出していた場所だ。それなのに、自分の手でさらして見せたことは一度も無い。

後ろに桐谷が立つ。息がかかった。

「あ……」

指の力が抜けて、髪がひと房こぼれる。拾う。また息がかかって、今度は反対側がこぼれる。拾い直す腕が震えて、肘が上がらない。持ち上げた腕のせいで胸が前へ出て、ブラの中で乳首が布にこすれた。足の間が熱い。立っているだけなのに、下着が湿って肌に貼りつく。

「汗、かいてるので。その、あんまり近くで見ないでください」

「かいてる。襟足の産毛が濡れて寝てる。人に触らせたことのないうなじだろ。それを今、自分の手で俺に出してる」

鼻先が生えぎわに埋まり、深く吸われた。嗅がれている。逃げたいのに、両手は髪でふさがっていて、背中を丸めることもできない。唇が襟足に置かれ、舌が襟の下の方の骨の出っぱりから生えぎわまでをゆっくり舐め上げる。腰の裏がぞくつと浮いて、スリッパの中で踵が上がった。

「咬む」

歯が乗った。硬いものが皮膚を押して、沈む。

熱い。うなじから背骨を真っすぐ落ちて、腰で溶けた。しびれが指の先まで走り、そのあとを甘いものが追いかけてくる。舌の付け根まで甘い。耳の奥で自分の脈が鳴っている。膝が折れた。桐谷の

左腕が腹に回って、体ごと受け止められる。手から落ちた髪は桐谷の右手が受けて、束ねて持っていた。

「あ、あ♡ きりたに、さ……っ♡ なに、これ♡ あつい、です……♡」

下着の中で、膣がきゅう、きゅうと締まっている。空のまま、止まらない。奥からあふれた愛液が腿の内側を伝って、ストッキングにしみていく。咬まれているだけでいっている。

歯はすぐには離れなかった。くわえられたまま、うなじの皮膚の下で何かを書き換わっていく。さっきまで部屋じゅうに散っていた桐谷の匂いが、一本の線になって鼻から腹の底へ通った。この匂い

だ、と体のほうが先に覚える。乳首がブラの布を押し返すほど硬くなって、息をするたびにこすれた。腿が震えて、膝の内側どうしがぬるりと滑る。

歯が離れ、跡を舌が覆うと、もう一度腰が跳ねた。舌は跡の縁を一周して、にじんだ汗ごと舐め取っていく。

「あおい」

耳の後ろで呼ばれた。

「付いた。……歯の形のまま、赤く付いた♡」

うなじに落ちる息が荒い。腹に回った腕がさつきより強く締まった。

腹を抱いていた腕が膝の裏をすくい、そのままベッドに下ろされた。背中がシーツに沈む。洗剤と、桐谷の匂い。あおいがブラウスのボタンに手をやると、手首ごとシーツに戻された。

「俺がやる」

ボタンが上から一つずつ外れていく。スカートのホック、ファスナー。ストッキングは腰から巻くように下ろされて、爪先で裏返った。ブラの肩紐が落ちる。最後の下着は糸を引いて離れた。その糸を桐谷が見ている。

「あの、電気は」

「消さない。見たい」

桐谷がネクタイを抜き、ワイシャツを脱ぐ。ベルトの金具の音がして、あおいは天井を見た。マットレスが沈み、裸の胸が上から影を落とす。スーツの上からは分からなかった肩の厚みが、すぐ目の前にあった。

手のひらが、胸を下からすくった。裸の胸を正面からすくわれるのは初めてで、自分の胸がこんなに重かったのかと思う。指が沈んで、形が変わる。親指が乳首の横を通るだけで、背中が反った。

「ん、あ♡そこ、あの♡触るところじゃ♡」

「色が薄い。舐めたら赤くなる」

舌が乗った。濡れて、熱くて、ざらりとした面が乳首を下から押し上げる。吸われる。ちゅ、と音がして、離れた所に息がかかって冷たい。反対側も同じにされて、両方がつんと立った。あおいは行き場の無い両手でシーツを握った。濡れた乳首を指の腹でつままれ、やわらかく転がされると、下腹の奥がきゅうと縮む。

「あ、あ♡ だめです♡ そこ、声が♡」

「いい声だ。北斗に電話してる時より、ずっと甘い」

膝を割られた。中指が濡れた襷の間を下から上へなぞって、クリトリスの下で止まる。そこから戻って、入口に沈んだ。くちゅ、と鳴る。指一本ぶん、内側が押し広げられる。

「狭いな。時間をかける」

指はゆっくり出入りして、抜くたびに入口をぐるりと撫でた。二本目が添えられる。広がる。褌が指の節に合わせて伸びて、腹側のざらついた所を押されると、足の裏がシーツをつかんだ。親指がクリトリスを、皮の上から小さく転がす。

「ひ、あ♡ きりたにさん♡ それ、いっしょは♡ わたし、また、へんに♡」

ぬち、ぬちゅ、と音が濃くなっていく。掻き出された愛液が尻の下まで垂れて、シーツが冷たい。自分の匂いが枕まで上がってくる。桐谷は急がなかった。指を開いて、閉じて、奥の柔らかい所ま

で届かせる。あおいの息が切れて、握ったシーツを離せなくなるまで続けた。入口の縁が指の節を通すたびにやわらかく伸びる。

「ほぐれた。二本、根元まで通った。入口がまだ俺の指の太さに開いてる」

指が抜けた。桐谷が膝立ちになり、下着を下ろす。跳ね出たおちんぽが、腹に付くほど反っていた。太い幹に筋が浮いて、赤黒い亀頭の割れ目から透明な汁が糸を引いている。あんなものが入るのか。あおいは腿を閉じかけて、閉じる前に膝を押さえられた。

指の抜けた入口は閉じきらずに指一本ぶん口を開けていた。そこへ亀頭が当たる。熱い。濡れた襞を左右に分けて、ぬるりと上下に

滑った。クリトリスをこすられて、声が漏れる。滑るたびに、入口の縁が亀頭の丸みに沿って広がりがけては、すぼまった。にち、にち、と音がする。あおいの愛液と、桐谷の汁が混ざっていく音だ。

「あ♡ あのと、そこで、こすってるだけ、でも♡ わたし、もう♡」
「濡らしてる。お前のが、裏まで回るように」

幹の裏まで塗りつけてから、亀頭が入口の真ん中に据えられた。押されて、縁がじわりと伸びる。まだ入っていないのに、腹の奥が先に開いて待っている。

桐谷の左手があおいの右手を握って、枕の横に置いた。右手が腰の下に入って、尻を少し持ち上げる。

「入れる。息、吐け」

押し広げられる。指とは比べものにならない太さが、入口をいっぱいに開いて、少しずつ沈んでくる。亀頭のいちばん太い所が縁を越えた時、ぷちゅ、と空気の抜ける音がして、あおいは握られた手を握り返した。熱い。腹の中に火を入れられたみたいに熱い。途中で桐谷が止まり、止まっている間に、奥からとろりと濡れてくるのが自分で分かった。それを待っていたように、また進む。襦が一枚ずつ押しのけられて、最奥に、こつ、と当たった。桐谷の下腹が、クリトリスにぴたりと着いている。

「全部入った。初めてで根元まで呑んでる。……あおいのナカ、やわらかい♡」

「は、あ♡ おなか、いっぱい……しゃべると、ひびくので♡いま、動かないで、ください♡」

「動かない。慣れるまでこうしてる」

本当に動かなかった。動かないのに、中でおちんぽが脈を打ったび、襜がひくひくと動く。下腹に手を置いたら、外から形が分かりそうだった。握られた手が温かい。奥がじんとほどこてくる。

「……もう、動いても、大丈夫です。たぶん」

腰が引かれる。くびれが褓を内側からこすって、入口の裏に引っかかる所まで抜けて、戻る。ぬちゅ。もう一度、同じ長さで。ぬちゅ、ぐちゅ。引かれるたびに褓がついていって、押されるたびに奥が開く。つながった所から押し出された愛液が、尻の間を伝ってシューツへ落ちた。

「あ♡ あ♡ これ、音が♡ すごくて、恥ずかしい、ので♡」

「あおいが濡らしてる音だ。もっと聞きたい♡」

汗が桐谷の顎からあおいの鎖骨に落ちる。

「あ、あ♡ きりたに、さ……ながい、です♡ 息が、つづかなくて♡」

「……蓮。短い」

「れん、さん♡」

握られた右手の指の間に、桐谷の指が一本ずつ入り直してきた。

「は、……あおい」

速くなった。ぱちゅ、ぱちゅ、と肌が鳴る。腰の下の手が尻を引き寄せて、いちばん奥の同じ所ばかり叩かれる。突かれるたびに胸が揺れて、立ったままの乳首が桐谷の胸にこすれた。空いている左手で、あおいは桐谷の肩をつかんだ。汗で滑って、つかみ直す。

「あ、あ♡ れん、さん♡ そこ、だめです♡ おく、あたって♡

初めてなので、変な声が出るのは、しかたないんです♡」

「出せ。……奥、当たるたびに俺を引く。あおい、そこだな。握ってる手で分かる♡」

「そこ、です♡　そこですけど♡　れんさん♡　れん、さん、なんか、くる、きます♡　あ、ああ♡♡」

奥を押し上げられたまま、膣が波を打った。おちんぽをしごくように締まって、ゆるんで、また締まる。足の指が丸まり、握った手に爪を立てた。汗の浮いた桐谷の喉しか見えない。

「あおい、締ま……っ」

抜かれた。腰の下の手が離れて、桐谷が自分のおちんぽを握る。あおいの愛液で濡れて光る幹が下腹に乗り、どく、と脈を打った。

びゅ、と精液がへその上に落ちる。熱い。続けて、みぞおちまで。胸の下にも一筋。腹の上に白い線が重なって、くぼみに溜まった。aの濃い匂いが立って、吸い込むと頭の奥がゆるむ。体の熱が少しだけ引いた。

「一週間だ。薬が効くまで、中には出さない」

「……はい」

腹の上がゆっくり冷めていく。もったいない、と思った自分に驚いて、あおいは口を結んだ。

桐谷がリビングからティッシュの箱を持ってきて、枕元に置いた。数枚抜いて腹に載せる。拭くのかと思ったら、そのまま肩を返

された。うつ伏せ。ティッシュごと、腹の上の精液がシーツに押しつけられた。

髪がよけられた。枕の横から、あおいのスマホが取り上げられる。上着のポケットに入れていたのを、ティッシュと一緒に桐谷が持ってきたらしい。シャッターの音がして、スマホは手の中に戻ってきた。

画面に、自分の襟足。生えぎわのすぐ下に、歯の並びのとおり赤い弧が、上と下に向かい合っている。汗で光っていた。

見たとたん、膣がきゅっと締まった。おちんぽが出て行ったばかりの奥が、もう一度濡れる。新しい愛液がうつ伏せの腿の間からシ

ーツへ垂れた。下腹の熱がまた上がってくる。

「色がいい。お前の肌だと、こういう赤になる♡」

「こ、これ、消えないんですよね。消えないのに。こんな、はつきり」

「髪で隠れる。月曜、向かいの席から見ても見えない。下にあるのを知ってるのは俺だけだ」

後ろから、右手の指が二本、濡れた入口をくぐった。さっきまでおちんぽが入っていた膣は、指を付け根まで簡単に吞む。左手の親指がうなじの跡の上に置かれた。写真の赤と同じ所を、縁に沿ってなぞる。

「ひあ♡ れんさん♡ そこ、さわると♡ うしろも、なかも、いっしょに♡」

「跡を押すと、ナカが俺の指を吸う。覚えるのが早い」

「おぼえて、ません♡ まだ、おぼえてない、です、けど♡ あ、あ♡ ゆび、ふかい♡」

ぐちゅ、ぐちゅ、と指が奥をかき回す。曲げた指先が腹側を押して、シートと下腹の間でクリトリスがつぶれる。親指が跡の真ん中を押すたび、背骨の中を甘いしびれが落ちてきて、膣が指を締めた。枕に額を押しつけると、握ったままのスマホの画面が頬の横で

光っていた。赤い跡。自分のうなじ。怖いはずなのに、あおいは画面から目をそらせなかった。

「あ、あ♡ れん、さん♡ また、きちや、う♡ んんっ♡♡」

尻が浮いた。指を奥までくわえたまま、腰が震えて、落ちる。シートに新しい染みが広がった。うなじの上で、親指がまだ円を描いている。

指が抜かれ、仰向けに戻される。桐谷がティッシュで腹を拭いた。くぼみに溜まったぶんも、胸の下の一筋も、丁寧に。

「あの。終電が零時十二分なんです。駅まで十分なので、そろそろ出ないと。着替えも無いですし、化粧水も」

「歯ブラシは洗面所に新しいのがある。化粧水は朝、下のコンビニで買う。定着するまで毎晩こうなる。泊まれ。朝、送る」

桐谷が隣に横になり、あおいを横向きにして後ろから抱いた。腕が回って、腹の上で組まれる。持ち上げようとしても、動かない。尻には、出したばかりなのにもう硬いおちんぼが当たっている。それが当たっているだけで、腹の奥がまたじわりと温まってきた。腿をすり合わせると、桐谷の腕が締まって、指先が下腹を一度撫でた。

「ん♡ ……いまの、熱のせいですから♡」

「熱だな。朝までに、あと何ぶんか来る。来たら起こせ」

毎晩。毎晩これが来るのだ。

「……始発で帰りますから」

返事は無かった。うなじの跡に、唇が一度触れただけだった。

土曜の午前二時。背中の呼吸は深くなったのに、あおいは眠れない。腹の底で、熱がまた上がってきていた。

暗い寝室で、チェストは手を伸ばせば届く所にある。一番上の引き出しに、預けた薬が入っている。あおいはそこへ伸ばしかけた手を、途中で止めた。

来たら起こせ、と言われている。伸ばした手を戻して、腹の上で組まれた桐谷の手首をつかみ、揺すった。

奥付

作品名 犬猿の同僚αに密室ヒートでΩバレした私は、番契約で毎晩発情イカされて離されない

サークル いい子指導室♡

発行日 2026・10・6

レーティング R18